



(写真) 東日本大震災発生後の3月14日。木村屋総本店三芳工場から被災地への援助として1万5千食のパンが提供され、三芳町職員が搬送トラックに積んでいる様子。



もしものとき
助け合える
地域でありたい

もしものときは
突然やってくる。



特集 もしものとき、大切なのは協力する地域のつながり



地域を
地域が守る。

東日本大震災をだれが予想できたでしょうか。いつ起こるか分からない災害には、日々の準備が不可欠です。また、日ごろから近くに困っている人がいたら声をかけ、手を差し伸べることができる「共助」も重要視されています。共助の町づくりのため、そしてもしものときのため、自分自身が、地域ができることを考えてみませんか。▶問い合わせ 自治安心課 内線265・266

大

正12年(1923年)、9月1日午前11時58分32秒。関東地方をマグニチュード7.9の大地震が襲いました。内閣府の報告書によると死者10万5385人。全壊全焼流出家屋は29万3387に上り、電気、水道、道路、鉄道などのライフラインに甚大な被害が発生しました。この日を忘れず教訓とし、防災への意識向上のため9月1日は「防災の日」と定められています。

東日本大震災発生 三芳町は震度5弱

記憶に新しい、2011年3月11日に発生した「東日本大震災」。宮城県三陸沖を震源地として最大震度7の地震が発生し、三芳町でも震度5弱を観測しました。町内では瓦の崩落や建物にひびが入るなどの被害が報告されました。

何気ない日常が一瞬にして変わる。東日本大震災発生後、各地で停電が起こり、電車もストップし、信号も止まったため、交通網は麻痺し、渋滞が発生。自宅に帰ることができない「帰宅困難者」も。川越街道には電

車で帰宅できない人たちが、歩いて帰宅する姿が多くみられました。

取り戻した日常と 震災から学んだこと

「ガソリン不足」「水不足」「食糧難」「計画停電」……。あの日からまだ5年も経過していませんが、日常を取り戻し、防災についての意識も徐々に薄れてきてはいませんか。

もしものとき。それは突然やってきます。大規模災害が発生したときに重要なことは行政と住民、住民と住民が手を取り合い、助け合うこと、すなわち「自助・共助・公助」です。

自助・共助・公助

「自助」とは自分自身が考え、行動すること。しかし、自分だけでは困難な時、行政が助ける「公助」では限界があります。そこで、地域で助けあう「共助」が重要視されています。

今月の特集は「if」。もし災害が発生したとき、自助だけではなく、地域が一丸となり、人のため、町のために協力し合うことが大切です。もしものとき、

日本中の心が一つに。被災地を応援。

Japan one love

2011年9月4日に開催した「みよしまつり」のテーマは東日本大震災復興支援。被災地へのメッセージを集め、復興支援Tシャツ、エコバッグを販売し、その収益を義援金として被災地に送りました。現在も「埼玉県被災地市町村助け合い制度」により福島県大熊町へのサポートをしています。



私たちができること。地域の防災のために尽力する人々たちを紹介しながら、一緒に考えてみませんか。